

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00954

研究課題名(和文) ヒューマンケアにおける包括的重層的スーパービジョンシステムの構築に関する研究

研究課題名(英文) Research on the construction of a comprehensive multi-layered supervision system in human care

研究代表者

田中 千枝子 (TANAKA, Chieko)

日本福祉大学・福祉社会開発研究所・研究フェロー

研究者番号：40276861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)： 支援人材の養成と支援の質を担保する有効な方法としてメゾ・マクロレベルの重層的介入によるスーパービジョン(以下SV)システムの構築に着目した。ヒューマンケア領域の新旧多様な支援職に対するSVや体制づくりの実態に対して量的質的調査で到達点や課題を明らかにした。海外のSV理論やトレーニング方法と日本の実際との比較をもとに今後の方向性を検討した。歴史や制度・文化的土壌を踏まえ、メゾレベルの体制づくりを組み込むSVモデルを提示しその意味と支援の視座の内実を検討した。SV体制づくりを現場の実態や工夫を分析し1)構造2)プロセス3)アウトカムの局面に分け、SV研修プログラムの開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急速に拡大するヒューマンケアの新旧領域におけるサービスの質保証として、制度ではSV体験や研修を支援職に課している。しかし人材養成の現場はSVの定義や支援とSVの関係、実践での使い方、その到達目標等は領域ごとに異なり不明確で、有効性の根拠に欠けるものとなっている。そこで旧来の徒弟的クリニカルSVとは異なる開かれたSVの再定義が必要となった。また地域で多様な社会的困難を抱えた人々のニーズに応えるためには、支援を作りだすSVの在り様を多職種他領域とともに調査・研究を続ける必要がある。地域の多様な支援者と利用者とともにSV文化を創っていくことが必要であることを明示できたことに本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)： For the human resources training of the human care, we gave next explanation about the construction of the supervision system by the creating of a meso-level system being important with three points. (1) We clarified the achievement points and issues related to the actual implementation of supervision practice and system building in each area through surveys. (2) We compared supervision theories and training with Japan with the foreign countries, and we showed it the meso-level as a supervision model and considered its meaning. (3) We examined the creation of supervision system to “support for supporters” from each aspect of structure, process, and outcome, and developed a supervision training program.

研究分野：保健医療ソーシャルワーク

キーワード：スーパービジョン ヒューマンケア 人材養成 対人支援専門職 ソーシャルワーク ケアマネジメン
ト スーパービジョンシステム 包括的重層的

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

- (1) 少子高齢化の進展と人口減少社会へと進み、経済的社会的に様々な格差が拡大してきた。また震災や台風などの自然災害や人災でもある災害被害が多発することにより、生活弱者の存在が顕著になってきた。新しく支援対象としてとらえられた生活弱者は従来よりもさらに多様なニーズを持っており、それにこたえる医療や福祉・介護等の社会サービスとその連携の在り様が問われる状況になってきた。加えて住宅や教育・権利擁護など多様なニーズにこたえるべくフォーマル・インフォーマル、専門職・非専門職を問わず、新しい支援職が制度的にもボランティアにも多く誕生してくるようになった。
- (2) 一方で複雑な社会問題の困難性や多面性が増すことで、支援人材の量的質的確保が社会的課題となった。しかし現実には支援現場の過酷な状況が人的疲弊を生み、バーンアウトなどの現象を促進させている。また支援者側の不安定な職場環境は、虐待などの未成熟なケアや若年層の早期退職等につながるものとなっている。
- (3) 21世紀は「地域の時代」と地域福祉や地域医療の推進が唱えられ、地域包括ケアの考え方が普及してきた。当事者と家族の心構えと選択をもとに「住まいや住まい方」を決めるとする考え方は、当事者主体の支援方法論を必要としている。それに伴う支援サービスの供給の仕方が、「意思決定支援」等の形を持って、当事者と支援者の尊厳の双方を支援する支援人材養成の土壌を育てるSV文化形成と結びつく可能性がある。

2. 研究の目的

本研究では、ヒューマンケアにおける多様な支援人材の養成とその質を担保する有効な方法論の一つとして組織や地域のメゾレベルを意識したSV体制を伴ったSVシステムの構築に着目した。本研究の目的は主に3つの要点で表示できる。

(1) 包括性

人と人との関係性によって行われるヒューマンケアは、災害弱者や生活困窮者など新しい支援領域や支援対象が注目され、そうした支援に新しい考え方や背景・視点や目的をもって、従来の専門性や動機付けとは異なる多様な新規人材が増加してきた。

また古くから人材養成がなされてきた領域でも、その支援の質を担保すること、またその体制を当事者や社会に対して直接保証することが求められ、専門職による支援は熱情や野生の勘ではすまされなくなってきた。拡大するヒューマンケア全体にケアの質が問われ、それに対する説明責任が伴い、それらを保証する仕組みや手法が研究される必要が出てきた。

その有効な一方法がSVである。従来ソーシャルワークや臨床心理などの領域ではSVの考え方や方法論が定着していた。一方で介護支援専門員制度発足以来、主任ケアマネジャーにスーパーバイザーの役割が付与され、同時にその更新研修が制度化された。その後の新たに誕生した支援職制度にも主任制度が導入され、養成および習熟課程に続けてキャリアパスとして設定されるようになってきた。生活困窮者支援や成年後見人制度などがそれにあたる。

また障害者等生活支援事業者の管理者研修に、管理演習とは別に、SV演習が1日追加された。認定社会福祉士の研修科目にSVの演習が組み込まれ、スーパーバイザーおよびバイザー経験が求められる。さらに社会福祉士や精神保健福祉士養成の学生に対して、実習SVが設定され、間接支援の目的とは異なる領域のSVとしてとり扱うことになった。

こうした多様な広がりを見せるヒューマンケアにおける人材養成のシステムとして、各領域におけるSVの実態を調査し、支援サービスの質を保つために、SVの内容と体制づくりの仕組みを明らかにすることによって、日本の多様なSV体制の実態について、その到達点や課題を包括的に明らかにすることを目的とした。

(2) 重層性

従来SVはスーパーバイザーとバイザーの関係性を軸に、個別事例を分析・検討するマイクロレベルを中心にした実践方法ととらえられていた。そのため研究でも徒弟制度のようにスーパーバイザーとバイザーのマイクロレベルに集約した関係的技術的側面が強調されてきた。しかし各種ヒューマンケア従事者制度にSVが養成課程や研修プログラムとして組み込まれてきたことで、その背景にある人材養成の政策・施策が考えるマクロレベルのSV像やスーパーバイザー・バイザー関係に直接影響を与える組織や地域の中でのメゾレベルのSV体制、そしてその領域の支援者を直接養成するためのマイクロレベルのSV研修プログラムの開発等について、マクロ・メゾ・マイクロと重層的に検討することが重要となった。本研究ではSV体制づくりの在り様を実践から学ぶことに重点を置いた。

(3) 統合性

ヒューマンケアの新たな支援領域の制度的採り入れを背景にSV理論と実践を統合することによって、マイクロにとどまらずSV体制づくりなどメゾレベルを強調したSVの再定義・再理論化「人材養成における支援者支援の方法」へ実践上の応用に進めることとなった。結果としてヒューマンケアの多様な領域・職種・専門性・組織・制度等を超えた開放型の新たなSV文化を支

援現場に醸成することに寄与することも目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 研究組織 研究拠点を SV 研究センターに置き、8 名の分担研究者と 5 名の連携研究者および各領域の研究協力者である 20 数名の実践家や行政・法人等との共同作業を行った。研究を SV の領域を意識した 7 グループに分け、それぞれの研究と合同の研究を組み合わせ、研究発表と討議を 3 か月に 1 回実施した。
- (2) 研究班 (A) 理論基礎 (B) ソーシャルワーク (C) ケアマネジメント (D) ソーシャルケア (E) 臨床心理 (F) 精神保健福祉 (G) 海外事情 を設定し、そこに分担研究者・連携研究者を配置するとともに学内外の研究協力者と各領域の実践者とも協働して、フィールドにおける質的量的調査を実施して実態把握を行い、研究テーマの設定を行った。また各地の行政や社会福祉協議会、専門職団体など地域の外部機関と一緒に、研修会や勉強会の企画・運営およびプログラム開発のための助言等も行ない、SV 体制を形成するメゾレベルの介入を検討した。(表 1)
- (3) 5 年間の行程 1~2 年目では文献レビューをしながら各領域の研究フィールドの把握と調査内容を決め実施した。3 年目には調査結果をまとめながら、より詳細な調査を行う班や結果を研修プログラムに反映させる班もあった。海外事情班では、1 年目に訪英し、ワナコットの SV トレーニングに参加し、その SV 理論を研修や発表会で zoom によって伝えながら、3~4 年目にソーシャルワーク班と合同でワナコットの流れを組むトレーナー、ペニースタート氏からの研修ビデオを作成し、研修会を開き、日本の SV 研修との比較を行った。
- (4) 研究班 7 グループはそれぞれ新旧多様な領域で SV を実施しており、とくに(A)理論基礎では新たな支援領域として SV に興味を持っている現場の実践者や団体からの問い合わせに対し、領域の状況に合わせた SV プログラムの作成のための研究プロジェクトを取り組んだ。
- (5) 班の運営としては全体によるグループ活動報告は 3 か月に 1 回の合同研究会・活動発表会を経て、メンバー間の研究方針や内容の共通認識を高めた。また最終年度は研究活動の総括として、ハイブリッドによるオープン・シンポジウムを 3 回開催した。また最終報告書を作成した。

表 1 各班の主な研究テーマと連携先

研究班	主な研究テーマ	連携先
(A) 理論基礎	多様なヒューマンケアにおけるSV	権利擁護NPO, M県介護支援専門員協会, O県事業所管理者研修プロジェクト講師, M県社会福祉協議会, 日本MSW協会実習指導者研修会講師グループ等
(B) ソーシャルワーク	SVの始め方 効果的SWSVの解明 SVスキル見える化 評価指標 スーパーバイザー支援システム	尾張スーパービジョン研究会, PSW版SV研究会, ソーシャルワーカーサポートセンター名古屋, A県社会福祉士協会有志
(C) ケアマネジメント	主任ケアマネSVの3機能評価比較	A・B・C3県介護支援専門員協会
(D) ソーシャルケア	地域ケアを支えるSVモデル SV職場環境	N市研修会有志, N市介護支援専門員協会
(E) 臨床心理	公認心理師と臨床心理士の教育・訓練・研修 質的量的調査	各地大学・大学院心理学部
(F) 精神保健福祉	スーパーバイザーになるプロセスとSV体制の課題	日本精神保健福祉協会 J地方精神保健福祉士協会有志
(G) 海外事情	英国SWSVの歴史と展開 (Morrison, Wannacott) 4×4×4(統合)モデル SVトレーニングと評価モデル	ペニースタート氏 (SVトレーニングプログラム)

4. 研究成果

(1) 海外 SV 論と日本の SV の実際との比較

本研究の源泉はスーパービジョン研究センターでのカデューシンの『スーパービジョンインソーシャルワーク 第5版』の翻訳作業にある。翻訳本出版時のシンポジウムにおいて、日本のSVとの比較を前提に、カデューシンのエコシステム論にもとづくSV関係と組織・団体・地域とのメゾレベルの要因の影響性が議論された。カデューシンはスタッフと上司との関係性でSVを描くことにより、とくに日本のSVにとって参考になる管理的機能の意味と、ソーシャルワーク部門の業務としてのSV体制の重要性を明らかにした(図1 Kadushin)

この組織メゾレベルのSV体制の考え方が、制度や組織に依拠する傾向の強い日本におけるSVとの比較および取入れの検討に意味があると考えた。(図2 福祉大版)

エコシステムによるソーシャルワークSV体制

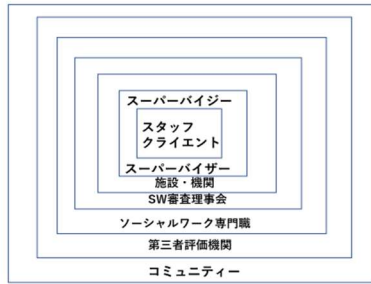


図 1

スーパービジョンの構造（日福大版）

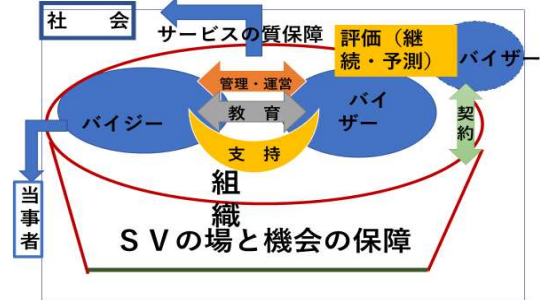


図 2

また英国のモリソン・ワナコットらによる 4×4×4 モデルを見ると、地域環境を含む重層的モデルとなっており、二者関係でとらえられがちな日本の SV の教え方や取り組みに対し、メゾマクロに展開するものとして一般化が図られている。また SV 体制は、主体や業務行動等 6 つの構成要素があると言われている（福山）が、ここでは実際の SV の各班の研究結果をもとに、トレーニング体制を中心に抽出した。

(2) SV（トレーニング）体制づくりへの工夫や介入

メゾレベルの介入研究の切り口として、ドナペディアンの対人サービスの 3 側面 ①ストラクチャー ②プロセス ③アウトカムで整理する。

① ストラクチャー

マクロレベルの SV システムには、主任ケアマネジャーのように法的に制度として資格取得や更新制度まで規定されている場合と、臨床心理師では専門学会、認定社会福祉士などでは専門職団体や団体の認定機構などが、認定資格として研修を用意している場合とがある。またさらにメゾレベルで任意やボランティアのグループ活動として、SV 体制を整えようと支援職自身が持続的・定期的な多職種での勉強会を開くことで対応している場合もある。こうした持続的グループメンバーの集め方やグループの構造、グループによる検討の方法や内容等についてもそれぞれ工夫があり、メゾレベルの SV 体制づくりの「集団」について、事例を通して検討した。

1) 「関係性」の利用

スーパーバイザーとバイジーの関係は上下関係になりやすい。それが SV の特徴であるバイジーの自発的な自らの振り返り（リフレクション）を邪魔しうるものとなる。またバイザーはバイジーの振り返りを待たずに、単なる指導や助言・アドバイズで SV を済ませてしまう。その振り返りの時間と余裕を作るために、尾張スーパービジョン研究会では、バイジーグループとバイザーグループに分かれて、水平のグループ同士のディスカッションでお互い自らの振り返りをしてから、その予習をもってバイジー＝バイザー垂直の関係で、個別 SV を行う工夫をしていた。（山口）

ソーシャルワーク班ではこれをスーパーバイザー同士のサポートシステムとして開発し、アクションリサーチとして方法と効果を明らかにした。

2) グループの利用 ～事例検討会からグループ SV へ～

通常の事例検討会であるグループワークは、事例提供者がバイジーとして、司会者のバイザーが参加者を動かして進めることが多い。そのためメンバーが何を指摘するべきかが不明なまま言い放って終わりになり学びになりにくい。しかしカデューシンのグループ SV では、グループ参加者メンバー全員が事例提供者に倣ってバイジーとして参加する形をとる。

そこでそれに沿ったグループ SV のやり方をしていて、福山 SV に対する調査として実際 SV を企画し開催に立ち合い、その事後評価について、実施後スーパーバイザーを中心にグループインタビューをとり、カデューシン流グループ SV の効果分析をした。（田中）

その結果短い事例提供者の体験を自らバイジーの立場で振り返るのは、「発想の転換で努力とコツが必要である」という意見が多く、「わが事」にすることに慣れるまで苦勞するメンバーも多くいた。しかし慣れてくると、メンバー同士の相互作用で自分の体験や感覚を仲間と競うように感じられ、一生懸命考えることができるという意見も多くなり、グループ SV の水平の相互作用によるグループとしての成長の効果であると考えられた。

② プロセス

SV 体制整備として様々なプロセスを捉えることができるが、バイジー側の専門職としての成長プロセスやバイザー側の実践能力向上プロセスをとらえて、そのプロセスの変化に影響した要因を分析するとともに変化の実相を分析することも研究した。またバイザーになることでの継続的サポート体制の弱いところを見出し、サポートのための仕組みを考察した。

1) スーパーバイザーの理論による実践理解と養成システムやカリキュラムの関係

7年前の認定社会福祉士養成課程におけるスーパーバイザーの養成システムとカリキュラムの分析で、自分の実践を理論で説明する演習が設定されていた。その理論的枠組みの実践事例への適用が演習課題である。7年前当時は、理論よりもアセスメントとプランニングの区別がつかない事例が多く、理論学習になりにくかった。(田中) その後大学教育や現場の研修の改善が行われた。昨年の学部学生の事例の理論的解析調査によれば、模擬事例で理論の目の付け所まで、検討できる学生が増えている。(田中) ただし実際の実践事例になると事例そのものの把握力に欠けるためか、成績は悪くなる。実践場面のアセスメント力をつける訓練が必要であると考えられた。

2) スーパーバイザー研修後のバイザー登録に向けた活動支援

認定精神・社会福祉士制度では、資格認定からバイザー登録までがシステムとして進められている。しかし単発の研修を受けただけでは、バイザーとしてSVを実施できる自信が持てない。スーパーバイザーとしての活動を支える仕組みがないことが問題ということが言われている。そのために3組織の緩やかな連結によるバイザーのサポートシステムが機能している。バイザーになるプロセスに3つの任意の支援システムが機能していることを示した。(山口)

③ アウトカム

SV体制づくりを進めることで、その効果や評価を調査や研修によって実施し、新たな評価基準や指標・プログラムにつなげる循環的なものになっているとしている。

1) 評価指標の開発

ソーシャルワーク班ではスキルの可視化を目標に進めてきたが、その帰結として各ソーシャルワーク専門職団体558名のバイザースキル評価指標を(4因子21項目)開発した。またソーシャルワークの実践能力の評価指標の開発にあたり、個別支援の領域だけでなく、メゾマクロ実践領域の能力や専門職の地位向上などについて着目した指標とした。(保正)

2) 教育プログラムの開発

主任ケアマネジャー研修参加者にはSV実施事例の提出がなされている。そのSVの内容吟味の結果、事例の整理とアセスメントがないままケアマネジメントのケアプランの助言がなされていることがわかった。この状況を改めるには包括的な事例の把握と適切なアセスメントをSVの場で、バイザー・バイザーのやり取りの中でなされることがよいと判断した。その結果エコマップとタイムラインを書くことを挟んでやり取りをするための演習を組むプログラムを開発し実施した。「SVが何をやることかが具体的にわかった」という評価を多くもらい、さらに新たな理論と演習の関係について検討ができるという循環が可能な体制となった。(田中)

引用文献

- ・A.カデューシン 福山和女監訳田中千枝子責任編集『スーパービジョンインソーシャルワーク 5th』P5 2018
- ・田中千枝子「スーパービジョン」『生活困窮者自立支援法 自立相談支援事業従事者養成研修テキスト』自立相談支援事業養成研修テキスト P345 2022
- ・田中千枝子「スーパーバイザーの教育」福山和女・渡部律子・小原眞知子他『保健・医療・福祉専門職のためのスーパービジョン』ミネルヴァ書房 P314-325 2018
- ・田中千枝子「ヒューマンケアにおけるSVプログラムの検討」『ヒューマンケアにおける重層的システム構築～SV文化の醸成のために～研究成果最終報告会』zoom録画 シンポジウム 2022
- ・田中千枝子「医療との連携 SV事例検討」日本保健医療福祉学会 zoom 2022年9月
- ・野村豊子「英国におけるソーシャルワークスーパービジョンの動向」『研究成果報告会(海外班)』zoom録画 シンポジウム 2022
- ・福山和女「スーパーバイザートレーニング 日本の実際」『研究成果報告会(海外班)』zoom録画 シンポジウム 2022
- ・大谷京子「あなたのSVのスキルを評価する」大谷京子 山口みほ『スーパービジョンの進め方』ミネルヴァ書房 P99-111 2019
- ・山口みほ「バイザーとしての私を育てる」大谷京子 山口みほ『スーパービジョンの進め方』ミネルヴァ書房 P113-132 2019
- ・坂野剛崇「心理支援専門職教育におけるSVの意義と課題」『関西国際大学心理臨床研究所紀要』関西国際大学 P49-56 2019
- ・二本柳覚「主任介護支援専門員のSVの実践に関する調査研究」『京都文教大学臨床心理学部研究報告』京都文教大学 P33-52 2021
- ・塩満卓「認定スーパーバイザーのスーパービジョンに関する意識変容プロセス」『社会福祉学論集』佛教大学 P79-95 2021

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 塩満卓	4. 巻 19
2. 論文標題 スーパーバイザーになっていくプロセスとスーパービジョン体制整備の課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 73 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂野剛崇	4. 巻 1
2. 論文標題 公認心理士・臨床心理士養成におけるスーパーヴィジョンの目的と実践の現状	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪経済大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 3 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保正友子	4. 巻 147
2. 論文標題 事例分析にみる熟達した医療ソーシャルワーカーの実践能力	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本福祉大学社会福祉論集	6. 最初と最後の頁 31 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本柳覚	4. 巻 13
2. 論文標題 主任介護支援専門員のスーパービジョンの実践に関する調査研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都文教大学臨床心理学部研究報告	6. 最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤田佳代 宮地さつき 二本柳覚	4. 巻 13
2. 論文標題 スクールソーシャルワークにおけるスーパービジョンの実施状況について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都文教大学臨床心理学部研究報告	6. 最初と最後の頁 33-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩満卓	4. 巻 17
2. 論文標題 認定スーパーバイザーのスーパービジョンに関する意識変容プロセス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 79-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩満卓	4. 巻 52
2. 論文標題 精神障害者ケアの脱家族化に取り組む精神保健福祉士の実践過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 111-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星野由利子 田中千枝子 福山和女	4. 巻 20-21
2. 論文標題 実習指導における「フリーズ」場面の分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本社会福祉教育学会誌	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 直原康光・坂野剛崇・安藤智子	4. 巻 32
2. 論文標題 子どもと同居する母親が体験する面会交流の継続プロセス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 53-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子・保正友子・山口みほ	4. 巻 47 (3)
2. 論文標題 ソーシャルワーカーの実践能力評価指標開発：3種の専門職団体への質問紙調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 54-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本柳覚	4. 巻 19
2. 論文標題 ケアマネジメント技術習得に向けた研修会の試行	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本社会福祉教育学会誌	6. 最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本柳覚	4. 巻 12
2. 論文標題 ケアマネジメント技術教育の効果に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都文教大学臨床心理学部研究報告	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 38
2. 論文標題 ソーシャルワークスーパービジョンスキルの評価指標開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク学会誌	6. 最初と最後の頁 39 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂野剛崇・佐藤仁孝・藤田祐介	4. 巻 19
2. 論文標題 犯罪被害者家族に対するサポート・グループ活動の意義と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 司法福祉学研究	6. 最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中千枝子	4. 巻 59
2. 論文標題 2017年度学会回顧と展望ー保健医療部門	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会福祉学	6. 最初と最後の頁 216-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村豊子	4. 巻 22
2. 論文標題 スーパービジョンの基礎的理解ー近年の新しい動向を踏まえて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本在宅ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 134
2. 論文標題 社会福祉の回顧と展望－原理論・方法論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会福祉学	6. 最初と最後の頁 103-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保正友子	4. 巻 140
2. 論文標題 医療ソーシャルワーカーの離職意向に影響を及ぼす要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本福祉大学社会福祉論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂野剛崇	4. 巻 2
2. 論文標題 心理支援専門職教育におけるスーパービジョンの意義と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西国際大学心理臨床研究所紀要	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 二本柳寛・奥田亜由子・菱谷隆宏
2. 発表標題 特定事業所における主任介護支援専門員が行う人材養成に関する研究
3. 学会等名 日本社会福祉学会第70回秋季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 照井孫久 野村豊子
2. 発表標題 主任介護支援専門員のスーパービジョン実践における課題の考察
3. 学会等名 日本ケアマネジメント学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 二本柳寛
2. 発表標題 主任介護支援専門員のスーパービジョンの実践に関する調査研究
3. 学会等名 日本ケアマネジメント学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 星野由利子 田中千枝子 福山和女
2. 発表標題 FKグリッドによる2層の実習スーパービジョン体制のあり方
3. 学会等名 日本医療社会福祉学会 web
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂野剛崇
2. 発表標題 非行からの離脱に向けた支援の在り方
3. 学会等名 日本犯罪心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂野剛崇
2. 発表標題 司法福祉学について再び考える
3. 学会等名 司法福祉学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大栗永瑞・二本柳覚・高橋香
2. 発表標題 Let's 事例検討
3. 学会等名 日本精神保健福祉士学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂野剛崇
2. 発表標題 ポスター 問題行動が見られた子どもの母親体験
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂野剛崇
2. 発表標題 シンポジウム 司法福祉界について再び考える
3. 学会等名 日本司法福祉学会第20回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂野剛崇
2. 発表標題 シンポジウム 再犯防止のために加害者家族と何ができるか
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷京子
2. 発表標題 ソーシャルワーカー役割認識と自己規定の変遷
3. 学会等名 日本ソーシャルワーク学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷京子
2. 発表標題 ソーシャルワークスーパービジョンスキル指標
3. 学会等名 日本社会福祉学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木俊文
2. 発表標題 いなべ市における事例検討の取り組み
3. 学会等名 日本社会福祉学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 ジェーンワナコット著 野村豊子翻訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 274
3. 書名 スーパービジョントレーニング：対人援助専門職の専門性の向上と成長を支援する	
1. 著者名 阿部恭子 坂野剛崇	4. 発行年 2020年
2. 出版社 現代人文社	5. 総ページ数 197
3. 書名 少年事件加害者家族支援の理論と実践	
1. 著者名 日本福祉大学スーパービジョン研究センター 大谷京子・山口みほ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 152
3. 書名 スーパービジョンのはじめかた：これからパイザーになる人に必要なスキル	
1. 著者名 野村豊子・汲田千賀子・照井孫久	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ワールドプランニング	5. 総ページ数 220
3. 書名 高齢者ケアにおけるスーパービジョン実践：スーパーバイザー・スーパーバイザーの育成のために	

1. 著者名 大谷 京子、田中 和彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 150
3. 書名 失敗ポイントから学ぶ P S Wのソーシャルワークアセスメントスキル	

1. 著者名 介護福祉士養成講座編集委員会、鈴木俊文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 人間の理解	

1. 著者名 福山和女、渡部律子、小原真知子、浅野正嗣、佐原まち子、田中千枝子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 保健・医療・福祉専門職のためのスーパービジョン 支援の質を高める手法の理論と実際	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 みほ (YAMAGUTI MIHO) (20319304)	日本福祉大学・社会福祉学部・准教授 (33918)	
研究分担者	二本柳 寛 (NIIHONYANAGI AKIRA) (30570725)	京都文教大学・臨床心理学部・講師 (34320)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野村 豊子 (NOMURA TOYOKO) (70305275)	日本福祉大学・スーパービジョン研究センター・研究フェロー (33918)	
研究分担者	保正 友子 (HOSYO TOMOKO) (80299859)	日本福祉大学・社会福祉学部・教授 (33918)	
研究分担者	塩満 卓 (SHIOMITU TAKASHI) (80445973)	佛教大学・社会福祉学部・准教授 (34314)	
研究分担者	大谷 京子 (OTANI KYOKO) (90434612)	日本福祉大学・社会福祉学部・教授 (33918)	
研究分担者	坂野 剛崇 (SAKANO YOSHITAKA) (90735218)	大阪経済大学・人間科学部・教授 (34404)	
研究分担者	鈴木 俊文 (SUZUKI TOSHIHUMI) (60566066)	静岡県立大学短期大学部・短期大学部・准教授 (43807)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関